

令和4年度 真庭市総合教育会議 議事録			
日時	令和5年1月27日 13:30~15:45	場所	真庭市役所3階 応接室
出席者	市長 : 太田 昇 教育長 : 三ツ宗宏 教育委員 : 井口利美、常本直史、徳山周一、高谷絵里香 政策アドバイザー : 山本健慈、山下陽子 オブザーバー : 吉野奈保子、大岩功(ともに郷育魅力化コーディネーター) 平田 勉 (マイスターハイスクール CEO) 西川 正 (真庭市中央図書館長)		
議題	<b>協議事項</b> 教育魅力化推進事業 ～持続可能な教育生態系～ について ①教育長から説明 ②出席者意見交換		
経過及び結果	<p><b>太田市長：あいさつ</b></p> <p>お忙しい中、また足元の悪い中、遠方からおこしいただき、また WEB でもご参加いただきありがとうございます。</p> <p>行政をやっていく中で、地域の活性化、発展、またいろんな課題に対応すると、やはり最後は人に行く。私達が幸せを追求する、それを支援するというのが私は行政だと思うが、結局行政が何をしようと主権者である人たちが、地域を担っていくということをしなければ、行政の政策も魂が入らず生きないし、それも私達の次の世代、またその次の世代ということで、結局は人である。今を支えてる人も成長するとともに次世代を作っていくような、そういう人作りということが鍵になるということに行き着く。</p> <p>何回も言っているが、私はあまり「教育」ということは好きではない。教える育むというのは傲慢じゃないかと考える。その人その人の持つ力、生きる力であり、考える力を自ら磨く、それを誘発していくような条件整備、いろんな意味でのそれが必要であって、上から教えるようなものではないだろうと思う。教育の重要性、就学前から小中高大大学ということで一昨年までは就学前から小中高の議論をしてきたが、教育の魅力化を考える上でも、生涯学習ということが非常に大切だと思う。</p> <p>1990年に絶頂になってバブルが崩壊すると、自殺も1万人だったのが3万になり、今は2万人ぐらいになったが、経済面でいうと「失われた30年」と言われる。GDPを一つの指標として見ると相当落ちてきており、1人あたりでは韓国よりも日本の方が下がっている。経済あるいは教育の格差がどんどん広がってきている。出生率も一つの要因だけではなく、もっと根底には別なものがあるが、異常な落ち方をしている。非正</p>		

規雇用が増え、男性の婚姻率は年収 300 万円を境にしてはっきりする。本質が何かといえば、結局お金がなかったら結婚できない。様々な問題を抱えている中で、私達が人間らしく生きていく、そして、国内の問題もそうだが、世界の中で地球の中で運命共同体の地球の中でどう生きていけばいいのかという課題もあり、そういう意味では 1 人 1 人が持てる自分の可能性を引き出していく。これは、今を生きる大人も、人間として成長していかなければいけないと思っているが、そういうことを通して、共生社会とは何かということ自体も議論としてあり、真庭の場合も私としては経済的な基盤を作りながら、旧小学校単位ごとの自治の単位を作りながら、最終的には人間としての幸せを求め、そしてお互いに主体性を持って地域を作っていく、そういう共生社会を目指すという方向に今来ている。

本日は教育の魅力化、そして持続可能な教育環境をどうしていくのかということについて、自由闊達にご議論いただき、また私も勉強させていただければありがたい。

**有元総合政策部長：出席者及びパブリックコメント紹介**

**【パブリックコメントについて】**

**1 中学校の部活動について**

中学校の部活動の地域移行については、子ども達のことを一番に考えて、地域・保護者としっかりと話してほしい。

**2 コミュニティスクールの運営について**

コミュニティスクールについて、地域の方を先生として招くので、学校と事前の打ち合わせを十分してほしい。

**3 他地域からの子育て世帯の誘致について**

1) 小学校について

既存の小学校以下の公立学校での特別な取組は必要がなく、真庭には伸び伸びと子育てできる環境があるという呼びかけが必要である。

2) 中学校について

ゆくゆく競争社会へ身を置くことを考えると、中学校での順位付けや偏差値付けを行うことが必要。成績をあまり数値化されず、はっきりしない中学校に移住してまで通わせようとする親はいない。

3) 高校について

真庭のような過疎地域においては、専門学科にこそ活路がある。地域の実情に合った農業科や総合学科で実績を残し、魅力があり選択される高校があることは、移住先検討において有利な要素となる。

4) 才能があり突出している子や障害等のある子への対応

真庭には、才能があり突出している子や障害等のある子の行き場がないと感じる。才能が突出した子に対しては、民間と行政が連携し、才能を伸ばしていける場を設けることで、移住者確保に繋がる。

障害等をもった子どもの受入れ施設の新設・拡充することで、発達障害の子に対して優しい真庭を子育て世帯にアピールしてほしい。

### **三ツ教育長：**

#### **【話題提起】「真庭市の持続可能な教育生態系」について**

これまで学校教育の話題が多かったが、今日全体としたら学校を核としながら、子供が地域で安心して過ごせる、そういう環境作りということが大きな話になるうかと思う。そもそもの議論の土台としては、子供というのは、五感を通して、自分で育つ力を持っているということと同時に今を幸せに生きる権利を持っているということが前提としてあった。

それに基づいて「真庭ライフスタイル」というのを実現していく上では、教育の充実というのが大切だということを議論してきた。何を大切にするのかということだが、学齢期を通じて地域資源を生かした学びと活動、いわゆる郷育の推進が大切と同時にそのことは、地域総がかりで子供の育ちを応援することであって、大人の学びや活動を促すことにも繋がるということが共有されてきた。

この数年間で仕組みとして、コミュニティスクールであるとか、あるいは地域学校協働活動、そして今は高校との連携組織等の導入もしてきている。探究的な学習の中で、地域資源をしっかりと結んで進めていくとか、あるいは学校の教育ビジョンをつくるときに、地域の方々と議論して、それを作り上げていくとか、あるいは学校施設を地域に開放して、そこが大人が社会教育をする場所として開かれてきているとか、そういったことが点として成果として上がってきている。

しかしながら課題としては、コミュニティスクールに移行してきたが、どうしても外部からの評価者のままで止まってしまっているとか、あるいは地域学校協働を進めていっても学校の求めに応じて支援をするという一方の形でとどまっているというような状況も生まれてきている。やむを得ないが、学校の教職員というのは異動がある。したがってそこに依拠した形で成り立っていると、持続性という点では課題があるとも感じる。したがって仕組みを導入したということで止まってしまうとなかなか前に進まないという実感がある。

それを超えていくためのキーワードは何だろうかといったとき、一つはその土台はそこに人が住む自然があるということと同時に、その場で人が育っている、協働している、ということだと思っている。

それと同時に子供たちの育ちを見守って、この地域で暮らせば豊かに学べる、あるいは豊かに過ごすことができるという地域作りを自分事として取り組んでいくということが大事なんだろうと考えている。

大人もそうだが子供というのは、1人だけで育っていかない。いろいろな関わりの中で人は育っていくので、一緒に動くという形を作っていく、一緒に動かないと仲良くなならないと思うので、自分事ということと一緒に動くということを大事にしたいということがある。それを運動として進めるためにどうしたらいいのかということで、仕組みを作る。仕組みを作っただけでは難しいので、いわゆるお客さんではなく、自分事にしていくということをしていかなきゃいけない。同時にそれを作っていく基礎としては、いろんな知恵を持ち寄ったり、対話が生まれるっていうことを進めていかなければいけない。

それをやっていくためには、学校を核とした取り組みを伴走支援する仕組みが要るんじゃないかということがある。伴走を支援していくっていうことは何かを代わりにするっていうことではなく、地域で行われる事実的な活動を起こしていくことを支援する。あるいは起こりつつある運動を、斜め後方から身を持って応援するということが大事だろうと思っている。そして活動の共有と地域資源との接続を進めていけたらと思っている。同時に真庭市全域に関わるが、各拠点で自立した活動が充実したものとなるように支援をする、また大人の学び場作りをする、あるいは意図的な人材育成をするというようなことを進める。そのため、学びと自治の振興センターというようなものを設置をして、地域の自立的な活動を支える運動を進めていけたらと考えてる。

どこから始めるのかということだが、中間支援ということ自体は、これは公私とか学歴を限ったものではないと思っている、例えば小学校でないといけないというものではないと思っているが、どこからこの運動作りを進めるのかということ。まずここでの提案は、子供が自由に遊ぶことを支える地域での運動作りを進めていけたらいいんじゃないかということ。

ここでいう「遊び場」というのは、いわゆるハード作りではなく、子供が自由に遊ぶということとを保障する場、これを子供と地域と共に一緒に作り続けていく運動として考えている。なぜ子供の自由な遊びがいるのかいうことは、後に西川館長から事例報告等もあると思うので、私の方からは願いです。

一つは「遊び」というのは、子供たちが試行錯誤しながら楽しむ自由であって、これは権利だと思っている。子供は、その中で五感を通して、いろんなことを学んでいく。1つの関わりだとか、あるいは自分でやる喜びであるとか、仲間への信頼であるとか、いろんなことがあろうかと思う。

また関わる大人は「遊び」ということになると世代を超えて繋がって一緒に学んだり、行

動を生み出すことに繋がりやすいと考えている。同時に子供が育つ力を発揮するためには、いわゆる禁止だとかルールで縛ってしまわない。

子供の自由を取り上げてしまわないというようなことを学ぶチャンスにもなると思う。取り組みを通して、顔の見える地域コミュニティ作りにも繋がると思う。

余談だが、学校でも社会でもどちらかという大切なことではあるが、ルールを守る、ルールをなぞる、そういうことが求められがちである。その中で自己肯定感を失っていきってしまうようなことも連日問題として起こっている。そういう場作りという、土台の部分でやっていい、工夫していい、そして変えていい。そういう自由を遊びを作り出す運動の中で体感していけたらなということを思っているところ。以上の提案事項は2点です。

1点は、持続的な教育運動を続けていくために、中間支援という仕組みを導入して、斜め後方から支えていく伴走することが大事なんじゃないかということ。

もう一点は、その中で、市民運動として各地域で遊び場作りに取り組んで、子供も育つし、関わる大人も育つし地域もコミュニティが元気になる、そういう好循環を作っていくかという2点である。

**太田市長：**

今の教育長の提起を踏まえて、それぞれ自由にご発言いただければと思う。

**高谷委員：**

市長の話と教育長の話の伺い、子供の話をする前に、やはりそばにいる大人たちがきちんと主体性を持って、楽しく生きているのか、という疑問が沸いてきている。

そういう姿を見て子供たちは成長していくと思うので、同時に考える必要があるのではないかと感じた。

教育長から提案いただいた中間支援や遊び場作りは、本当にこれからの時代に必要になってくることを感じる。大人全体が主体性を持って生きていけない社会になっているというか、経済成長自体も良かったのかわからないが、まわりの評価軸で生きていても幸せになれないということにみんなが気づいてきていると思うため、いかに自分の軸で生きていくか、それを大人も実践し、子供たちにも伝えていきたいと感じた。

**徳山委員：**

教育長の話にもあったが、真庭らしい教育の魅力化の仕組みがだいぶ整ってきたのではと思う。特に学校と地域を繋ぐ仕組みに魅力を感じる。真庭にある「人、もの、こと」を生かす工夫がされている。学びと自治振興センターが、うまく表現されてるんじゃないかと思う。地域学校協働本部ができ、来年度からはコミュニティスクールが全校で取り組まれるということになる。それが形だけで終わらないかという心配もあるが、説明にあったように、そうならない仕組みとして、学びと自治振興センターや地域コーディネーター

	<p>を置くことで、地域学校協働本部やコミュニティスクールがより機能し、地域と学校を繋ぐことができるのではないだろうか。これは真庭の教育魅力化を進めるうえで目玉にもなる。そして、まず「遊び」に焦点を当ててということだが、真庭で遊びの場はたくさんあるが、子供たちはもう少なくなってきたのが現状。子供たちが自由に遊ぶことを保障するというのはかなり難しい課題であると思う。今、子供たちを集めて遊ばせるということは、親や子供だけの問題ではなくなってきたというふうにする。地域をどうやって巻き込んでいくかということや、自分事として考える人をどれだけ増やしていくかというようなことが大事になってくると思う。その意味でも、こういう仕組みがうまく機能していけば、子供たちの「遊び」が意義あるものになり、真庭市が目指す「遊び」に繋げていくことができると思う。</p>
	<p><b>常本委員：</b></p> <p>今、学校では地域と繋がりがながら教育活動を行うことが広まってきていると思う。探究的な学習というのであれば、そこからさらに「これは何かな？」などと疑問に思っさらに追求してみるという活動に繋がっていくところで、どうしても大人や教員が引いたレールの上を行かして経験させる体験させることになってしまっている。自分たちから何かを生み出すという力がなかなかついていないのではという疑問もある。</p> <p>最近では、思考力や判断力の育成を重視した「主体的、対話的な深い学び」というようなことをやっているし、何を学んだか、例えば高校を卒業したときに「こういう学習をしたことによってこんな学びができた、こんな力がついた」というような目標を立てている。最近クラスの中のある支援が必要な生徒を見ると、この子が高校を卒業したときに何ができるのだろうかというふうに思いました。力はついてきたが、それから社会に出るにあたって何ができているのか、できるようになっていくか、というところの視点で今やっていかないと、子供たちは社会に出て、社会人として活動できていけないのではと思う。だから、経験や体験をいろいろさせるのもいいが、その力をもってこれができるんだという自信を一つでも二つでも付けるという、「何ができるか」というのがこれからの私が思う一つのキーワードだと考える。そういうことを見ると、子供の頃から何もなかったところから子供たちが想像力を働かせながら「遊び」を作っていくという場を作るのもとても良いことだと思う。</p>
	<p><b>井口委員：</b></p> <p>「遊び」というものをこんなに真剣に議題に出さなければいけない時代になったということに悩み、そういう世の中になっているんだと改めて感じた。子供たちを見ていると外で遊んでいる子は少なく、家の中でゲーム機を使っていることがほとんどで、その中には私の世代は特に入っていけない部分があって、そこでまず親から子供への繋がりが途切れた部分があり、それに教育長は問題を感じられているではと思った。今、教育長がお</p>

っやられているようなことは、もしかしたら今までは家庭教育の中で行われていたことなのかとも思う。しかし、今の世の中では、親はやはり男女隔たりなく仕事に行くということが基本になっていて、子供の遊びを見守ってあげたり、子供の自由な発想を見守ってあげたりする余裕が、残念ながらないというのが実情。したがって、子供に欠かせない遊びを突き詰めていったときに、このような提案をしてくださったというのは、これから子育てしていられる親にとってはありがたいことなのではと思う。

そして、今の学校教育の中で 60 代 70 代の方のボランティアの方に頼ってところが沢山あり、その方たちが教えてくださることも沢山あるものの、それに頼ってはいもうすぐに終わりが見えてくるような気がしており、持続可能にするためにもやはり中間支援の仕組みは必要な時代になってきたと思った。

#### **山本 政策アドバイザー：**

一つは総合教育会議というたてつけについてお話したい。総合教育会議というのは、教育委員会制度をどうするかという議論があり、教育委員会制度が変わったわけだが、その時の変えるという理由の一つが、市長を教育政策に関与させた方がいいんじゃないか、あるいはさせるという方がいて、それが一定法改正に反映されて、教育委員会は残すが、こういう総合教育会議という形での会議を制度として取り入れようという趣旨だった。そのときに心配されたのは、政治が教育に介入するんじゃないかという点。教育は教育委員会に任せ、首長はそれをバックアップするということは、太田市長は繰り返し言われている。ぜひ教育委員会としても市長としても大切にしてほしい。

私自身は、今は学校法人の理事長だが、よく皆さんには学長をやっていると間違われる。学校法人の理事長と大学の関係も市長と教育委員会の関係と一緒に、学校法人理事会っていうのは、とにかく大学がやる条件整備をする、その人が経営するというたてつけ。両方兼ねているような人もいたりして、結構口を出したがる理事長もいる。学長をやったことがあるので、結構口を出そうと思ったらたくさん口出すこともあるが、大学は自由にやってくれというふうに申し上げている。ただ理事長として私が言ってるのは、大学という名において、若者の支援ができることは公序良俗に反しないものは何でもやれと、大学はこんなことやったら恥ずかしいんじゃないかとか、そんなこと考えるなど、目の前の学生が必要なことは全てやれと、いうふうに言ってる。学校に出なくなり、学校に出づらくなっている子のところに職員が訪ねていたり。大学で何をやってるんだみたいなことを言う人もいるかもしれないが、しかし私はとにかくそういう 1 人 1 人を大事にしようと言ってやっているし、市長もそういう姿勢ではないかと思う。

今日は「遊び」という話になっている。「遊び」は皆さんイメージの中にいろいろあるかと思うが、極めて多様である。「遊び」という名において、その子供が何を楽しみにしてるの

か、人生の幸福は何なのかということがわかる行為が「遊び」だと考えた方がいいと思う。だから「遊び」というと、みんなで遊ぶというイメージかもしれないが、1人で遊ぶ方がいい子もいる。みんなと遊びたくない、これは人間も動物と同じで性質があるので、みんなと群れたくないという動物もいたり、群れた方が楽しいということもあるため、「遊び」ということイメージを固定化させてはいけない。つまりは、その中で自分の幸せは何であるかっていうことを自覚するプロセス自体が「遊び」だと考えてもらったのがいいと思う。今後の議論もそういう話になればいいなというふうに思う。

#### **山下 政策アドバイザー：**

教育長は、持続的な教育活動の担保と、遊び場作りのお話をされ、その中で実は子供が生きる力を獲得することが非認知能力として挙げられていた。今も一般的に言われてることで、その辺りを狙ってらっしゃるのではと思った。遊び場作り自体にイメージがわきにくいかもしれないが、今あるいろんな大人のサードプレイスを整理していきながら、ここは使える、使えないというようなものをさび分けてしていけば中山間地域だからこそできる遊び場作りができそうで大変面白いと思った。私も今、学校と地域を結び結節点ということでもがいてるところだが、教育長の問題意識は、まさに私の問題意識でもあると思った。

非認知能力について少しまとめたみた。倉敷南高校で21世紀型能力を使ってルーブリック評価という形の5段階評価を行った。当時から非認知能力の育成という話があり、倉敷南高校で行った非認知能力と言われるものも含めた21世紀型の能力で、例えば認知能力と非認知能力に分けられるが、見えやすい学力として、知識技能といったものがあり、見えにくい学力として、例えば思考力や表現力がある。さらに見えない学力というのがあり、例えばチームワーク力やキャリア形成力といった子供たちの生きる方向性を作っていくような自立的な活動力とか人間関係形成力などが入ってくる。この見えにくい学力と見えない学力等を含めて非認知能力と言う。このあたりは、実は学校ができることもあるが、特に見えない学力のあたりは地域が担っていくことができるもの、地域で学ばせていくことができるもので、もっと言うと大人の生き方そのものが問われる部分なのではないかと思っている。

地域と学校が関わりを持ちながら担っていくということで考えていくと、中山間地域でのサードプレイスで非認知能力を作っていくのだと思う。そういう意味ではすごく面白いアイデアだ。実はキャリア教育というものを分析してみると、縦軸が生き方を考える、横軸が生きる力をつけるというふうに考えてみたが、この生き方を考える縦軸の部分というのは、地域との関わりの中でかなりできてくるものではないかと思う。生きる力をつける部分は、どちらかというと学校にシフトしていて、その部分を先ほどのサードプレイスという



ころで考えていくことができたらと思った。サードプレイスの時代でいうと、子供にとってはやはり先ほどの非認知能力を育てるといったことがあるのと、もう一つは、先ほどの倉敷南高校の 21 世紀型の能力を使ってこういう力を育てようということでキャリア教育を行ったのだが、一つの指標としての偏差値とルーブリック評価で出てきた非認知能力の評価を相関させたら、非常に強い相関が出てきた。複雑なことを説明するのは難しいので端的に言うと、非認知能力、例えば部活で得られるチームワーク力とかいうものと、偏差値とは強い相関があるということが、ルーブリック評価から見られたということ。私は昨日高校の志望調査が出て結構暗い気持ちになったが、やはり学力を育てるといことと、非認知能力を育成するといことは全く別のものではないといこと、そのことをしっかりと共有していくことが大切だと思っている。

**太田市長：**

ありがとうございます。一番最後のところも非常に大きな問題だと思う。そういうことを踏まえて、今そういう意識を持ちながら、真庭で実践していただいている大岩さん、西川さんからどういうことをやってるのか、また今までの議論を踏まえて、自分はどうなのかということもおっしゃっていただければありがたい。

**大岩 郷育魅力化コーディネーター：**

私は真庭なりわい塾がきっかけになってここに来た。その時点では独身だったが、結婚して 40 歳になった今、大人と子供を繋ぐような仕事をしていることを大変誇りに思っている。学びのコミュニティについてのお話があったが、そういうものが実装されていくお助けができたらと思っている。

明日、高校生たちが地域と一緒にいる蒜山未来会議があり、今日はその発表準備で高校生たちと午前中時間を過ごしていたが、彼・彼女たちが「ここは失敗できる学校だ」ということを言っていた。学校というのは失敗できる場所であるべきなのかどうかという話をしたいと思う。遊ぶ空間というのは、おそらく失敗しても全く問題ない。結果というものが特に求められていないため、学校という場所にいろんなものが集中した時代において、失敗も含めて学校であるのか、それとも棲み分けをして、それは地域でやはりそういう空間を作るべきで、学校というのは別のものを専門的に目指していくべきなのか、そういう役割分担の話が今後できていくと大変嬉しいと思いつながり話を聞いていた。

活動としては、子供たちと森の中に入っていき「森の日」という活動をしている。年間 5 回のイベントで、夏に行った際には参加者が 60 人を超えた。お父さんお母さんと一緒に森に入り、子供たちと遊んでいる裏側で、太田市長と西川さんが親御さんたちと対談をするような時間を作った。子供たちは遊び足りてない、というのが私の印象だ。

みんなと遊んでいる間に、人間関係性として、これ以上踏み込んだら嫌われるんだとか、こういうコミュニケーションなら大丈夫だとか、そういうことをたくさん失敗し、成功もしていると思う。そういう空間を意図的に作っていくのが大切なのではと考える。遊ぶ場所はいっぱいあるが、私が来た5年前に太田市長から「良い子は川で遊ばない」というのを何とかしてくださいという話を聞いた。良い子ほど川で遊んでいるというか、遊ぶということで、非認知能力であったり、非常に大切な部分を養っていると思うが、私達大人が寛容に子供たちを見守るということをしなればいけないのだろう。子供の数が減ったというのを裏返せば、大人の目が増えすぎたということ。私達は意図的に空間を作っていないといけないと思っている。

ちなみにこの森の日は、そのあと出張型をさせていただいて、秋に幼稚園の先生方20名ほどの研修を担当した。その場でアクティブラーニング的にアンケートをしたところ、自然保育とか自然体験を優先度が高いと考えている人は100%。そういった場所が近くにあるというのも100%。ではなぜできないのかというと、その日にそのスタッフがいないから、職員が足りないから、ということだった。どういうふうにすればそこに職員を配置できるのか、前回の会議で山本先生から何か市政として保育士さんたちに何かしらのバックアップがあったらいいとか、そういった話もあったかと思うが、具体的にそういう話になっていくと私のやってることとしては大変ありがたい。そうやって子供たちと遊びの場所を作りながら、高校とかそういう学びに繋げている。

明日は、真庭起業塾というのがある。真庭なりわい塾も最終の発表会があり、後輩たちの発表を大変楽しみにしている。さらに市民大学講座というのに斎藤幸平さんという方が来られる。まだ見たことのない世界をみんなで見たいこう、探したいこうという知的な好奇心は、大人が主体的に幸せに生きてなければ、子供たちもおそらくできないと思うため、知的遊びのようなものも充実させながら進めていけたらいい。

#### **西川 中央図書館長：**

中央図書館の館長の西川と申します。図書館をこれからまち作りの自治の拠点にしていこうという計画があり、その計画に何らかお役に立てればと思っている。ずっと埼玉の方で子供の遊びも非常に大きく絡んだまち作りにずっと関わっていた。今日はどちらかという、図書館長というよりは大学でも教えている「遊び」を中心としたまち作りの経験からということでお話させていただけたらと思う。

今なぜ遊ぶのかということで、結論的には真庭でどんな18歳を迎えるのか、ということに非常に強く関わるのでは思う。真庭にとどまる、真庭に戻ってくる、また真庭に誰かを連れてくるということに繋がると思う。教育委員さんには、以前お話ししたことと重なると思いますが、よろしくお願いします。

私の育ちは、滋賀県北西部の高島というところで、里山という言葉が生まれた15軒くらいの集落で育ち、夏は毎日この川で泳いでいた。7人家族だったのが今誰もいなくなり、これからどうするかという時に、本当に集落を残すんだったら誰かに住んでもらうのがいいと思っている。迷っているところ。お前が帰れよ、と言われてたりして。それはそうなのだが、いろんな活動をしていて、今日は大学の講師っぽい話が多いかなと思う。

日本の子供たちの文化力はとても低い。ご存知の方はご存知だと思うが、「自身自身に満足してる」が、一番低い評価。「つまらない、やる気が出ないと感じた」ことは一番高い評価。「憂鬱だと感じた」という率も一番高い。「社会現象が変えられるかもしれない、自分が当事者であると思えているかどうか、私を変えることができる」と思っている若者も一番低い。「うまくいかかわからないことにも意欲的に取り組む」これも一番低い、ということで、これは日本全国の問題なので別に真庭だけの話ではもちろんないが、真庭はいかがでしょう。

真庭の子供達はどうか？ということで2つ提案がある。1つは子育て教育を語るなら目標は、「今現在の子供たちの自尊感情を高めること」に置くべきではないか、と私は考えている。ウェルビーイングというのは、身体的精神的社会的に良好な状態にあることを意味するライン。平たい言葉で言えば、子供たちが夜寝る時に「今日、本当に楽しかったな」と思って布団に入れるかどうか、「明日もきっといいことがあるよね」と思えるかどうか、ということなのではと思う。「今日そうなんだ」ということは、とても大事な気がしている。子供は将来の宝とよく言うが、本当は「子供たちの声がまちにする」という意味、「まちに子供たちの声が聞こえる」というのは、今の社会の宝が子供たちなんだというふうにも言えると思うし、それから将来のための今ではなく、先ほどの教育長の話のとおり、子供にとっては「今こそが人生なんだ」ということを大人たちはもっと考えなければいけない。先ほど、学校と地域の役割分担についての話があったが、確かに学校は教育機関なので将来のための機関だと言うこともできるが、その手前で「子供たちは今日生きてるんだ」ということを、よほど自覚しないと子供たちの自尊感情は高まらないと思っている。

なぜ自尊感情が低いのか、大学の学生にさっきのグラフを見せたときこんなふうにつけてくれた。「自尊感情が低いのは空気を読む教育あるから」、「規則に縛られすぎ」、「集団行動を求めすぎなのでは」、「学校の勉強に意味を感じられていない」、「面白くない」、「自分の意見を出す機会が少ない」、「言われたことをやるというのが多く、自分の意思で動いた経験が少ない」、「子供がやったことに対して大人がまず否定することが多い」、「評価することが多い」、つまり点数をつけるということ。「なぜその行動したかを考えていない」、「聞いてくれない」ということ。これは雑談だが、もう真庭市は全国一

齊学カテストに参加しないという選択をしてはいかがかという話をしていた。上の娘と下の娘が5歳違いなのだが、その間に全国一斉学カテストが始まり、上の子の宿題の量に比べて、下の子の宿題量は5倍ぐらいになった。本当に時間を取られて、冬休みも宿題が多く、「どうしようお父さん」、と冬休み初日から泣いていたので、担任の先生に「あんまりじゃないですか」と言いに行ったことがある。今は高校3年生になったが、これはちょっと異常な気がしている。今も子は、時間がない。「やりたいことをやる時間が少ないから、自尊心が低いんじゃないか」と学生は言っていた。とある僕の大学の授業でこのような話をしていたら、最後にレポートでこんなふうに書いてくれる学生がいた。「小学校、言う通りにしてください。中学校、言う通りにしてください。高校、言う通りにしてください。大学、自分の事ぐらい自分で考えなさい。何をしたいかわからない、甘えるな。いきなり素っ裸で北極に投げ込まれるような冷たい厳しい就活、急に自分の頭で考えろ、自分の得意分野で活躍しろ、と言われても、受動的な教育を受けてきた人にとっては酷です。」これは、日本のことで、大きな課題です。どうしたらウェルビーイングが高い状態にできるのか、先ほどの非認知能力の話は確かにその通りだと思うが、僕が忘れられない保育園長先生の言葉がある。「外で毎日遊べば体力がつくが、忘れてはいけないのは、子供は体力をつけるために遊んでるんじゃない。遊ぶためには体力が要ることはあってもね」何かできることが増えていくというのは、「あの木に登りたい」と思って一生懸命自分なりに苦勞をした結果として、体力がついていたりするからもっと高い木に登れたりする、ということ。その登ろうと苦勞している時間そのものが「遊び」ということで、登りたいと思うことというのは、さっき言った「今日楽しかった」というのは「楽だった」という意味ではない。多分、苦勞と工夫がコインの裏表になってるはずで、苦勞と工夫の時間が面白かった、だからそうしたら明日もきっといいことがあるに違いない、と。

かつて学校の評価委員をした際、先生が挨拶できる何%、〇〇ができる何%と数字をいっぱい出され、こんなに頑張っていますと言われた時に、それはご苦勞様です、で終わった。ただ、例えばPTAの役員になって校門の前でおはようございますと子供たちに声をかける当番をやっていると、本当に上を向いておはようと言ってくれる子は少なく、下を向いて今日も大変みたいな顔で朝から来ている。この評価委員会的时候に、その学校の先生に、結局学校の評価は本当にその学校の子供たちのうち何%が学校を好きかだけで測ったらどうだろうか、好きだと思って行く場所にはみんな顔が上を向いているはずなので、それを評価軸にしたらどうか、みたいな話をしたら、先生たちは苦笑いをしていたということがあった。キーワード「遊ぶ」というふう思う。これはやってみるということ。山本先生の話にもあったように、何もしないと1人でいるのも含めて自分でやりたいことを決められるという意味でもある。先ほどのうまくいかかわからないことというのはつ

まり結果がわからないことをやってみるということ。つまり、「遊ぶ」ということが全然足りておらず、結果としてみんなに自信がない、自尊心が低いと言っているのではと思うが、どうだろうか。今、子供たちはどんな時間を過ごしているのだろうか。昔の子供たちや皆さんと何が違うのだろうか。

これは概念図で、その前に大人がいる・いないというのが縦軸で主導権が大人を持ってるか子供を持っているかの違いというもので、昔大人がいる場所は学校で、典型的な教室では大人が指導して評価する場だったため、主導権を大人が持っていた。でも、放課後のような大人のいない場所では子供たちが主導権を持っていませんでしたか？別に学校の先生を敵に回したいわけではないが、主導しているのは、学校の先生や大人で、大人がいる時間が広がってきたことで子供たちが主導権を持てることがなくなっていくという歴史が、この半世紀の歴史ではないだろうか。自分で物事を決められない。安藤忠雄は、「今の子供たちの最大の不幸は、日常に自分たちの意思で何かができる余白の時間と場所を持っていないことだ」と言う。余白の時間と場所は、放課後が典型的なものだったし、街のいろんな片隅はみんなそうだった。

これは私の住所地のある埼玉の団地で月1回の遊びの広場やっているところだが、こんな感じでみんなでやりたい放題やったりとかして、本当に幸せな時間だ。コロナなんで距離を置けばいいだろうと思って、将棋の駒を大きくしてみたりとかいろいろやっているが、これも通りがかりのおじいちゃんと遊んだりしている様子で、ある時常連の少年たちが友達を誘ってきた。なんて言って誘ったかっていうと「ここはね、俺たちができるんだぜ」って言って誘っていて、すごく素敵な言葉だなと思った。でも、これを裏返すとここ以外はどんな時間かいうと、「俺たちができない時間」だということになる。だから悲しい言葉でもある。でも、子供たちの隣に大人がいないわけにはいかない時代になっている。そうすると大人がいるが、子供が主導権を持っている時間をどうやって作ってあげればいいのか、ということになるはずである。例えばファシリテーターがいる学びの場というのは、今学校でこれからどんどん導入しましょうと言われており、アクティブラーニングや主体的対話的な学びというのは、多分このことを指しており、先生は指導する存在からどんどんファシリテーターとして子供たちが学ぶことをファシリテートする、促す助けるという仕事に変わっていくべきだというふうに文科省でも言われている。おそらく、総合学習の時間が入ってきたぐらいから言ってるはず。

もう一つが、このプレイワーカーがいる遊びの場、プレーパークと冒険遊び場と言われるもの、が必要なんじゃないかと。このプレイワークの視点を持った大人を地域にあるいは施設に増やしていく必要があるのではないだろうか。このプレイワークは新しい言葉だが、これは遊ばせるでも遊んであげるでもない子供への関わり方のことを言っている。

学童保育の先生たちのクリスマス飾り三つの作り方というのがある。1つは、これをやらせましよう指導するパターンで子供たちにとって一番人気のない先生で、あれをやりなさい、これをやりなさいと放課後の時間なのに課せられてばかりのもの。次に頑張っている先生がやりたがってしまうのはこれをやってあげましよう、と先生がクリスマスツリー作ってサービスしてしまうパターンで、これも違う。もう一つ最後が、このプレイワークと言われるもので、子供たちが自らやりたいと言ったらクリスマス飾りを作りましよう、どう作るかも子供たちに任せましようと言って、こうしたらいいんじゃない、こうしたら面白いかなということと一緒に作っていくという形が一番人気のある先生がやっていること。問題なのはさっき失敗しちゃいけないという話をされていたが、結果がうまくいこうがいまいが、こうしたらいいんじゃない、ああしたらいいんじゃないのと時間を過ごせていたら、これが「遊ぶ」ということ。この時間こそ人生、その子のその日の人生なのであって、この時間をどう確保してあげるかということを中心に、大人の関わり方のことをプレイワークという。どこまで準備をして、どこまで子供たちに任せるかという事を日々考えていくということなのだろう。それから生命や後遺症に関わるようなリスクはちゃんと省いてあげるとのこと。全部を用意した方がいいのか、一部を用意した方がいいのか、全然用意しない方がいいのか、ということその子供たちに合わせて考えていければいい。このプレイワークという考え方を知っていて、大人がそばにいる必要があると、学校の先生、保育園、幼稚園の先生、学童保育所の支援員、地域の子供に関わる大人が認識しているかどうか、これからとても大きな意味を持つてくるのではないかと思う。

公園をただ作ったところで多分遊びが始まるわけでもなく、お母さんたちがその公園を利用して自分たちで声掛け合って関係作っていくかという、絶対作れない時代になっている。みんな緊張してみんな迷惑をかけちゃいけないと思って、それぞれの家族で頑張っているというのが今の状態。ちょっとでも子供同士でトラブルが起こったら、もうすぐ止めに入る、後ろに付いて回る状態で、子供たちは喧嘩すらできないのが今の状態。そんな緊張している状態のところプレイワーカーを投入してみんなで作っていくことをやれないと、もう子供たちの今日楽しかったを作ることは相当難しくなっているというのが現状ではないだろうか考える。

これはイベントの事例で、上尾市というところで市役所の駐車場を使って2000人でダンボールと落ち葉で遊んだ。ダンボールを3tトラックいっぱいを持ってきて、もう好き勝手使ってくれてという感じでやったら、もう本当に大騒ぎ、でもみんなめっちゃ楽しかったと言って、いつも苦情が入らない市役所に「よくあんなことやってくれた」というプラスの評価の電話がいっぱい入った。こんな感じで表情もすごくよく1日過ごした。これは学童保育の法人でやったイベントだったのだが、「それまで子供はおもちゃを与えて遊ば

せるものだと思っていた。でも、ただそこにあるもので遊んでるだけの楽しそうな我が子がいた。そこに親も入り一緒に遊ぶことがあれほど幸せだったとは、目からウロコでした」という感想をいただいた。「おもちゃを与えて遊ばせるものだと思っていたが違った。すごく嬉しかった。」。このイベントは3年前まで少し違うイベントで、学童から保護者が動員され、当日朝7時からダンボール迷路を作るイベントだった。それを「子供祭り」と呼んでいて、立派な迷路が10時に完成すると子供たちがやってきて、完成したすごい立派なダンボール迷路を子供たちが来てすぐに壊し始めてしまい、壊しちゃ駄目と怒り、1人1回だと怒り、並びなさいと怒り、順番ですと言って怒って、という感じで大人の指示する声や禁止する声がいっぱい聞こえていた。でも、実はその時も終了時に笛を吹いたら、みんなで壊していいよ、という時間があり、その終了時に迷路を壊しているときの子供は一番楽しそうで、さらにこのゴミの山になった遊び場の中が一番楽しそうで大の字に寝てしまったり。これを見て、もうやってることが違うんじゃないかと私達も気がついて、これはやっぱりやめよう、とはじめて子供自身が遊びを作り出していく場にしよう、とみんな全部有志で、義務はやめようと言って負担感のない達成感ある形を目指そうと言って作ったのが、このダンボール遊び場だった。発想を大きく転換したものだ。サービスはやめようということ。大人が子供にサービスをしている結果、子供に禁止とか言っても本当に虚しいだけ。でも、この半世紀を考えると大人たちが一生懸命稼いだお金で子供におもちゃを買い与える。でもお金で買ったものを子供が壊すと大人が怒る。何で買い与えておいて怒るんだ、というのと同じ構造。それで子供たちは全然元気じゃないという状態。これはおかしい。野外でやっている良さというのは、僕の言葉で言うと子供が壊そうが何をしようが怒らなくてもいいということ。大人は穏やかに見ていられ、落ち葉とか散々どうぞどうぞと。これで落ち葉のプールなどやったが、本当そのときは僕らも落ち葉が宝物にしか見えなかった。それを子供達がぐちゃぐちゃにしようが何しようが全然誰も気にならないでニコニコしている。買った物を買って壊したと怒っている大人と、拾ってきたもので全然怒らないニコニコしてる大人と、どちらの大人を子供の横に置いておくと子供は幸せでしょうか、という話だと思う。

次は日常の例で、福岡市で「わいわい広場」という広場がある。これは福岡市で120の小学校で行われていて、地域住民などの協力や、事業者、プレイワーカーも入っていて、あるNPOが学生のプレイワーカーを養成して、それぞれに配置したりしながら、全小学校でやっている。わいわい広場と検索してもらうといいマニュアルが沢山出てくる。本当にプレーパークそのもの。やればできると思うが、やはり校庭を遊び場に変えるという発想でプレイ福岡というNPOがプレーワーカーの養成を一定担ってやっている。ボランティアさんも研修するし、プロでここに関わる人にも研修する。毎日これが子供た

ちの日常にあるということが大事で、イベントよりは本当は日常、ということ。

もう一つ被災地の気仙沼でプレーパークを作った事例を紹介する。これは3月11日の後に4月、5月の頃に遊び場を被災地に作って子供たちを応援しようというプロジェクトを行ったときのもの。

**【映像を流す・NHK 報道】**

このような感じで地域の人たちが集まって何かを作る場所にもなっていて、そのこと自体がまち作りになっている感じ。おばあちゃん達のサロンの場にもなっていて、遊び場が街作りになっているというのは多分こういうことを言ってるのだと思う。

自尊感情ということで、他者を尊重することができるようになるには、やはり尊重される体験が子供たちには必要で、私はこれが好き、私はこんなことをやってみたい、私はこう思う、という存在が承認されることを子供の時代にどれだけ体験できるか、ということが自尊感情を高めることに繋がっていくのではないかと思います。「今日も生きてよかった」ということで、大人はどうあればいいのだろうか。このまちの大人は、私が主導権を持つことを歓迎してくれる、私がやりたいことができる、一方的に禁止されないし、必要であれば対話しどうしたらできるかを一緒に考えてくれる、つまり私は尊重されていると思って18歳を迎えられるかどうかなのではないだろうか。ここだったら自分でやりたいことができるまちだったら、子供たちは真庭にとどまるのではないだろうか。または1回出たとしても、ここだったら何かができると思えば真庭に戻ってきてくれるのではないか、もっと言えば真庭に誰かを連れてくるんじゃないか、ここだったら君のやりたいことができるよと言って、人を連れてきてくれればもっといいというふうに繋がっていくのではと思う。

私はこれが好き、私はこんなことをやってみたい、私はこう思う、図書館もそんな声が聞こえる場所でありたいし、そういうことを相談してくれる場でありたいなというふうに思っている。子供と共に一緒に作っていただけたらなと思っている。ご清聴ありがとうございました。

**太田市長：**

どうもありがとうございました。いろんな実践を通しての話や、大切なことをお伝えいただきました。時間の関係もありますけども、関係者にできる限り一言喋っていただきたい。

**吉野 郷育魅力化コーディネーター：**

真庭市がコミュニティスクールを進める中で、地域と学校が「遊び」という事をキーワードにつながっていくというのいいことだと考える。コミュニティスクールをする中で、いい形で地域に先生方も関わっていただくことでいい形での連携が生まれたらと思う。今日、「非認知能力」、「地域」、「遊び」、「子供の主体性」などの非常に重要なキーワードが出ており、幼児教育の部分が書かれているが、子育て支援課がこの会に入っておらず、行



政の仕組みとしても教育委員会と子育て支援課の連携がとれていないことに懸念がある。こういったテーマが出て、教育長のビジョンを全く幼児教育の現場に共有できていないことは非常に懸念すべき事だというふうに思う。非認知能力はいつからですか、主体性はいつからですか、という時に小学校一年生から初めてですという事はないし、このことについては、もう一度どうするかを市として考えていただき、この場で一緒に議論できるようになればいいと思う。保育園は非常に閉鎖的な空間で、現場の保育士さんは目の前の子ども達の事を真剣に考え、保護者さんのことまでは考えるが、地域のことまでは考えたことがないという人がほとんどだと思うので、もう少し広い視野で考えて、地域も応援しますよ、という環境をつくっていかないと、お母さんが本当に困ったときに孤立したり、相談できなかつたりするのではないかと思います。

**太田市長：**

今後の会議では、関係課で来れる職員やこども園の現場の先生も来れるときは参加してもらえるようにします。

**平田 マイスターハイスクール CEO：**

子供以上、大人未満の世代が一番居場所がないのではと感じる。子供の自由な遊びを保障するのに、先ほどの西川館長のスライドを見て、芸術やアートな世界を自由に体験させることは有効な手段ではないかと考えた。子供造形広場という講座で子供が画用紙とクレヨンを与えられても、何色を使うという自己決定ができない子供が、回数を重ねるごとに自己解放して、生き生きと好きなことをやっているという姿を見た。子供の場づくりを設計段階から子供に考えさせて、手づくりで中庭づくりをした経験もあるが、子供はすごく生き生きしていた。子供がスキップしてくる学校となったと校長も言ってくれたのを覚えている。真庭にはたくさんのイベントがあるが、動員数で評価するのではなく、次世代との協働を文化にするという視点で企画段階から若者を引き込んでいくとよいのではないかと思います。また、子供が憧れを持ってると自らそうなろうと子供の方が、そっちに向かって力を発揮していくので、その憧れをちゃんと見せていくことが、どの世代にもできていくのかなというところを検証してみるといいかなと思う。

**太田市長：**時間の関係ありますが、せっかく傍聴の方が来ていらっしゃいますので、2人限定で今までのところで、あるいは今さっきのような意見も含めて発言いただければと思います。

**傍聴者（黒川議員）：**

プレイパークは、岡山で水害があったときに初めて知った。被災地だけのものではなく、日常の中にあってもよいもので、子供だけのためではなく、まち作りに繋がっていく大人達も楽しめる場なんだと学んだ。真庭で機会がなかったのも、本当に中間支援というもの

を通してどうやって子供たちの学びの場を保障していくのかってということについてはもしかしたらプレーパークだけじゃないかもしれないが試みだと思う。

子育て支援課がこの会に入っていないことについて、子育て支援課がやっている「こども子育て会議」にも教育委員会が入っていないことについては問題だと思う。その場でなくてもいいのかもしれないが何らかの接点が必要ではないかと思う。

**太田市長：**

どういった形かは別として、より連携できるようにしていく。

**傍聴者（伊賀議員）：**

かつてメタ認知の力をつくるということで大論争が起き、それは非系統的で学力がつかないということもあり、学習指導要領の見直しで、教科書もすごく厚くなった。今の子供たちが主体的に回るようになってきているか、生活科や総合的な学習は残っているが、それは生きる力が必要な内容になっているかということも見直しがあると思う。

保育園・幼稚園の保育士も変わりました。まさにこういう保育園・幼稚園は、いわゆるメタ認知の力を作っていく場というふうに思う。だからこども園と小学校の連携というのは極めて大事で、残念ながら所轄が変わっているので切れてしまった状態がある。機構的なことも含めて見直していただきたいと思う。

主体的に遊べる場を作ろう、それを地域の力にしようというのはすごくいいことだと思う。保育園・幼稚園も地域の中にある。地域という海に浮かぶ船が、保育園や幼稚園や小学校や中学校でなかったらいけないというふうに思う。

**太田市長：**

組織だけでなく、地域そのものが変わっていくということも大事だと思う。

**井口委員：**

「子供以上、大人未満」というところで、高校生アルバイトが許可されていないことが残念だと思う。社会に出るちょっとした一歩、つながりとなると考えるので、検討していただきたい。

**常本委員：**

いろんな方のご意見を聞き、真庭はみんなで子供を育てようという想いをすごく感じる。子供をなんとかしよう、地域をなんとかしようという想いを会議をするたびに感じる。現場にいたときに総合的な学習の時間で「やってみよう」という合い言葉でやっていた。ある生徒の「発表をやってみたら失敗したけど、笑われなかった」という言葉が印象に残っている。このような場作りが学校の中でも、地域でもできたらいいし、やりたいことをやらせてみるという努力をしたい。そんないい地域になればいいと思った。

**徳山委員：**

プレーワーカーが大事になってくるのではと思った。先日、蒜山校地を応援する会の中で、「蒜山校地は、どんな子供を育てようとしているかちょっと見えてこない、もう少し見えてきたらいいな」という話に対して「子どもの未来を考えることは、その地域を考えること」という話が合った。地域一人一人が自分の事として考えていかないと蒜山の子どもの事も見えてこないという事なのかと思った。地域の人が「遊び」のことを考え、子供たちの未来、地域の未来を自分のこととして捉えるようになったら、プレーワーカーも出てくるのかなと思う。そういうことをしてくれる人達を社会が認める雰囲気醸成していくことが大切だと思った。

**高谷委員：**

大事な話をたくさん聞いたというのが一番の感想。プレーワークの考え方はこれから子供たちと関わって行くうえで大切で、これから自分自身ももっと学んでいきたいと思った。学校訪問する中で、学校の先生達と子どもの関わりを見せてもらえる場面があるが、先生達も子ども達の主体性を出せるように積極的に関わってくれているというのは感じているが、より深く子ども達に働きかけるためにも、こういった考え方を学校の先生や保育士、コミュニティスクールに関わる地域の大人たちなどが合同で研修を受けるような機会もできたらよいのではと思う。西川館長の話の中の「ここは俺たちができるんだぜ」という言葉がすごく印象的で、真庭が子供も大人も「俺たちができるんだぜ」という地域になればうれしいなと感じた。

**山下 政策アドバイザー：**

真庭から倉敷に転勤したときに印象的だったことは、地元の祭りに参加するという生徒が真庭では6割から8割いたのに、倉敷ではほぼ0だった。街が好きと回答した人数も2割を切っていた。そういったことから真庭は、そういった意識という点での資源を持っているし、この前岡山県観光連盟の人材育成セミナーに参加したとき、真庭市から岡本さん（岡本旅館）と和田さん（普門寺）が発表をされていたが、他の自治体に比べ、際だって楽しそうにしていた。そういう資源について、真庭市はすごく豊かにあるが、自己認識が薄いのではないかなという思いがある。さっきの西川さんの話で言うと、ちょっと出来上がってるものもあり、それをうまくサードプレイスのものに盛り込んでいくことで、子供たち自身の学びにもなり、やはりそこで何か力をつけて子供たちは、次のステップに行かなければいけない。そのステップに着地できるような力をつけていくというのは大人の責任だと思う。サードスペースを作ることは、子供にとって非認知能力的なものも含めてすごく意味があることだが、大人にとっても意味のあることで、地域の子供と関わることによって地域の未来を真っ当に考えたり、自分自身を律したり、俺ってどうなんだ

ろうって何か背筋が伸びるところがあって、そういう意味でもやっぱりサードプレイスの遊びの場というものの意味合いはある。教育は社会全体の問題で、子どもたちにどうするかという問題ではないというところを強く感じている。真庭市が資源として持っているのを生かして次のステップになったらいいなと思う。

**山本 政策アドバイザー：**

一番必要なのは、自分はどういう状況が幸せなのか分かる力。どういう状態、どういう空間、どういう時間を自分にとっての幸せであるかを主張できるようなことが必要。不幸せの状態から脱出する力にもなるし、不幸せな状態を幸せにしていくというエネルギーにもなるので、あらゆる状況でこれを貫いてほしいと思う。それが自尊感情という表現もある。

もう一つは、教育委員会は地域の文部省のようなもの、皆さんがやると思ったら、それを実現すればよい。地域の子供に責任を持つということは、皆さんの権限をフルに行使するということ。学力テストの実施なども皆さんが決めて実施している。どんな政策が幸せであるかは、皆様が責任をもって住民に説明しなくてははいけない。そういうことをぜひ深く認識していただきたい。地域の子供に責任を持つという立場で進めてほしい。

今日の議論はみんなその材料が出てるといふふうと思う。そのためにやっぱり学校と保育園というと0歳から15歳まで高校で18歳まで育つ学校に支配されている空間があるので、学校の先生もこういう議論に参加して、保育士さんも参加して一緒に子供の幸せを考えてるんだという議論ができるというふうにぜひしていただきたい。こういう議論が学校に浸透しないと進んでいけない。

最後に、学びと自治の振興センターは面白いと思うが、学びと自治の振興センターには、昔から公民館というのがある。これを公民館と別にするのか、公民館を改定するのか、公民館に機能を付与するのか、いろいろ考えられると思うが、そのあたりも議論しないといけない。

**三ツ教育長：**

学校の現場では「先生これしていいですか」とよく聞かれる。なぜそうなるかというと、ルールで縛り、レールを歩かせているということだと思う。そこからこぼれると自己肯定感が下がっていく。この認識は、きちんと共有しないといけないと改めて思った。

今日は、学校教育と言うよりも「遊び」を子供と一緒に作っていくという運動ということだったと思う。話の中で印象に残ったのが、子供というのは、やがて大人になっていくし社会を担っていく存在だが「今を幸せに生きる」ということをきちんと考えていかなきゃいけないと改めて感じた。その過程というのは、山本先生がおっしゃったように、「自分は何が幸せなのか」ということを獲得していく過程なんだろうと思う。その意味でも遊びを

通じて、子供の今の幸せを大事にしたいなと思った。同時に大人の価値観を問うていく運動と感じている。大人になって思い出を聞くと、多くは昔の悪ガキ自慢。知恵を働かして、多くを学んで、危険も犯していたかもしれないが、生き生きとした時間となっていたのではないか。「遊び」は、多世代をつなぐ力がある。次世代につなぐ力がある。大人が学び、関係者が学び、価値観を変えていく場であると思う。真庭市の場合、そんなに公民館がたくさんないので、学びの実施を多様な人たちが集まって聞き合う、話し合う、一番たくさんあるのは公立小学校だから、そこを拠点にしながら、地域の方々と協働する活動をして、一緒に子供たちが幸せになる地域を作っていくという運動をやっていけたらいいなと思いながら今日の時間を過ごした。具体については詰めていかなければいけないが、1歩でも2歩でも前に進むように、また庁内連携も進むようにしていきたい。

**太田市長：**

私自身も大変刺激になった。この会議だけではなく、なかなか結論は出ないが、こういうことを考えていく、深めていく、議論していくこと自体が大変重要だと改めて感じた。できる限りこういった議論の場を広げていきたい。特に学校現場、学校にも一定程度権限がある。確かに一定程度、共同歩調を取る必要もあるけども、学校の置かれてる状況も違うし、規模も違うので、もう少し学校が独自判断をしてよいようになっていけばと考える。ただそれをなかなか許容する雰囲気は地域社会にないから、保護者や主催者にこちらからも問題提起をするべきだと思う。いたるところで、何か画一的にしないと安心できない状況がある。結局自分が主体的に自分を知る。先ほどの自分の幸せということも関係するけれども、自我の確立、個人の確立が非常に弱い。しかし個人の確立というのが近代民主主義にとって一番大事なこと。教育でも社会でもそうなので、自分を考える、自分は何なのか、自分の幸せとは何なのか、と考えるのは、ある意味ではしんどくて、ある意味では楽しい。そこを根本的にやらないと、日本社会は大変なことになってしまう。

なぜこれをしなければならぬのか、校則を本当に受け入れなければならないのかなども考えていただけるような現場になってほしい。真庭市に関して言えば、自分たちの地域は、それぞれが幸せになるために、どういう条件整備をするかということを考えて、教育も、そして行政も連携しあってやっていければと思う。また議論を深めていければありがたいと思う。今日はありがとうございました。